

子どもの声と地域性を生かした 小・中連携・一貫教育の現状と展望

～北海道稚内市の取り組みを通して～

古川 碧

●要約

本稿は、北海道稚内市における公立小中学校の実践研究を事例に、小中連携・一貫教育の望ましい進め方について考察することを目的とする。稚内市における実践研究の特徴は、第1に、児童生徒の実態から出発し、児童生徒の意識の変容に着目しながら進められていること。第2に、そのねらいを学力向上に特化することなく、生活力や社会性など、児童生徒の全面発達を保障する見地から取り組まれていること。第3に、学校と教育行政の共同事業として、地域性を生かしながら地域ぐるみで実践していることである。

こうした視点による連携教育こそ、校種間の段差を解消し、児童生徒の連続的な成長を促し保障する小中一貫教育の確かな土台となる。

●キーワード

中1ギャップ

児童生徒の意識変化

稚内市小中一貫教育実践研究事業

はじめに

小学校で学んだことを生かしながら、中学校進学への期待と希望を失うことなく中学校生活に適応して意欲的に学習・生活し成長していくことを支え促す学校教育が求められている。(1) しかし、「小1プロブレム」(2) や「中1ギャップ」(3) に見られるように、校種間の段差が大きな要因と考えられる学校生活への不適応現象が起きている。

これらの問題を解決し、すべての児童生徒の連続した成長を保障するための小中連携・一貫教育の望ましいあり方は何か。北海道稚内市における児童生徒と教職員の意識調査及び各小中学校における実践研究を事例として考察し展望する。

I. 「中1ギャップ」の実態

学級担任制と教科担任制の違いにみられるように、学校制度や教育課程、指導法の違いなどが「中1ギャップ」の大きな要因となっている。本章では、児童生徒の声をもとに、より具体的な要因を探り出し、小学校と中学校が9年間を見通しながら連携した取り組みを行うことによって、児童生徒が学校生活に適応していくことを明らかにする。

I. 1. 「中1ギャップ」の全国的な傾向

代表的な事例として、いじめと不登校の状況を示す。

(1) いじめ

2006年度における全国国公立小学校6年生のいじめ認知件数は、13,047件である。この学年が中学校に入学した翌年の中学1年生のいじめ認知件数は、21,077件であり、中学校進学と同時にいじめ件数が、約1.6倍増加している(4)。

(2) 不登校

2007年度全国国公立小学6年生の不登校児童数は8,145名である。この学年が中学校に進学した2008年度の中学1年生の不登校生徒数は23,149名であり、約3.1倍増加している(5)。

I. 2. 北海道稚内市における不登校の実態

稚内市における小中学生の不登校は、学校や教育委員会、福祉関係者などの努力により2003年度をピークに減少傾向にあるが、過去10年間の不登校児童生徒数を比較すれば、中学校入学後の不登校生徒数が6.1倍となっている(6)。学年別発生件数ではないので「中1ギャップ」を直接的に表したものではないが、「小中ギャップ」を如実に示している。

	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008
小学校	3	4	2	2	2	1	0	0	0	1
中学校	15	9	12	10	15	8	5	2	7	9
合計	18	13	14	12	17	9	5	2	7	10

中学生になって不登校が増えることの要因として、家庭的な問題や思春期特有の個人的課題などと

合わせて、「低学力問題や人間関係」⁽⁷⁾、「学級担任制と教科担任制の違いによる児童生徒の状況把握や指導の相違など」⁽⁸⁾が考えられる。

I. 3. 生徒の目から見た小学校と中学校の「違い」

稚内南中学校1年生があげた「小学校と中学校の違い」の上位項目は次の通りである⁽⁹⁾。

① 勉強 55.6%	② 部活 27.8%	③ 時間 18.0%
④ 制服、スクール・ジャージー 9.7%	⑤ 上下関係、敬語を使うことが多い 9.7%	

自由記述では、勉強がむずかしい、勉強時間が長い、テスト範囲が広い、教科が増えた、リアルに学力が出る、授業の進む速さや授業のペース、教科毎に先生が違う、勉強量などをあげている。「時間」については、20分休みがない、5分の休みが10分になる、遊ぶ時間や学級にいる時間が長くなる、下校時間や帰宅時間などをあげている。これら生徒自身が感じている「小学校との違い」が、「中1ギャップ」の要因であり、「中1ギャップ」克服のためには、こうした「違い」に対する抵抗感や不安感をできるだけ少なくしていくことが重要である。

1. 4. 教職員の目から見た小学校と中学校の「違い」

稚内市の各小中学校に対して行ったアンケート調査によれば、教職員は児童が小学校から中学校に入学するときに、次のようなギャップや不安を感じているとおさえている⁽¹⁰⁾。

第1に、「勉強について行けるか」ということをはじめ、英語などの新たな教科や教科担任制、テストや家庭学習のことなど主に勉強にかかわる不安。第2に、先輩との関係や新しいクラスでの友だちづくりなど人間関係に関すること。第3に、小学校のクラブ活動とは大きく変わる部活動に対する不安と期待。特に、中学校の部活動の実態について、「知らない」、「わからない」ことが一番の不安になっていると指摘している。

中学校側では、1単位時間が45分から50分になることによる集中力の欠如、教科担任による指導の違いへの戸惑い、定期テスト重視など評価方法の違い、宿題が少ないなど家庭学習を含めた勉強の仕方の違い、部活動による生活リズムの変化などをあげている。

なお、小中併置校の児童生徒も同様の傾向にあるということであり、「中1ギャップ」克服の課題は学校規模にかかわらずすべての学校に共通する課題になっている。

I. 1. 5. 考察

(1) 「中1ギャップ」の要因としてあげられたものを分類すれば、①学習、②部活、③生活リズム、④人間関係の4つとなる。この認識は児童生徒と教職員が一致しており、「中1ギャップ」克服の取り組みを児童生徒とともに進めることの必要性を示している。

(2) 具体的には次のような方策に取り組むことが考えられる。

ア)「学習面」では、中学校入学前に中学校の学習やテストについて、目標・内容・評価規準・学習上の留意点などを明記したシラバス(「学習のめあて」)を使いながらガイダンスを行

う。また、中学校教員による英語や理科などの模擬授業を実施する。

イ) 中学校入学当初の4月は、短縮授業やモジュール授業など、中学校の学習・生活リズムの体得や小学校教員も参加した放課後の「復習勉強会」を計画するなど、生徒の中学校生活及び学習への円滑な移行・適応を目的とした「新入生受け入れ作戦」を展開する。

ウ) 「人間関係」については、とくに、「先輩・後輩の関係」を重視し、小学校における「縦割り活動」の経験を引き継ぎ、中学校における「ピア・サポート」体制の構築など、上級生と下級生が助け合い・励まし合う人間関係づくりを一層充実させる。

エ) 生徒指導について、「学校生活のルール」に関する小中間の共通理解とそれに基づく共同指導や保護者と連携した指導を重視する。

オ) その他、少数ではあったが、生徒側に「進路」についての記述があった。小中間での進路指導を中心としたキャリア教育のあり方、特にその接続(系統性)のあり方について検討していく必要がある。

カ) また、小学校と中学校の違いに、「責任感」と答えた生徒がいた。生徒の心理的・社会的発達に応じ社会規範を含む社会性の育成に関する指導が重要である。

Ⅱ. 児童生徒の意識とその変化

Ⅱ. 1. 中学校入学前の期待と不安

次の表は、稚内中学校への入学を目前に控えた稚内中央小学校6年生の中学校生活に対する「期待」と「不安」である⁽¹¹⁾。(数字は%、資料Ⅱ.1.1及びⅡ.1.2参照)

「期待」することとしては、「行事」が第1位で(42.1%)以下、「人間関係」(47.9%)「学習面」(42.1%)「部活」(39.6%)「生徒会活動」(14.6%)と続いている。人間関係では友だちに対する期待が大きい。(人間関係の項目中70.8%を占めている)

「不安」では、「学習面」(48.8%)「人間関係」(41.0%)「生徒会活動」(35.4%)「行事」(27.6%)「部活」(21.9%)の順となっている。内容としては学習面では、選択教科も併せれば8割強の児童が不安を感じている。また、テストや成績に対する不安も7割を超えている。高校進学についても6割以上の児童が不安感を訴えている。人間関係では、上級生に対する不安が多い。生徒会活動への不安も上級生に対する不安を反映したものと思われる。行事に対しては、自分の不得意なこととのかかわりで不安があるという児童がいた。こうした児童の期待と不安に応える具体的な方策が求められる。

項 目	期待	不安
学 習 面	42.1	48.8
行 事	59.4	27.6
人 間 関 係	47.9	41.0
部 活 動	39.6	21.9
生徒会活動	14.6	35.4
平 均	40.7	39.4

Ⅱ. 2. 入学後の意識の変化

次の表は、調査対象の稚内中央小学校6年生が稚内中学校に入学し、約1年間、中学校生活を体験してみて入学前に抱いていた「期待」と「不安」がどのように変化したのかを調査したものである⁽¹²⁾。(数字は%)

「不安」面では、テストと成績が入学前と変わらず7割を大きく超えている。高校進学についても依然として5割強となっており、学習や進学に関する不安感の強さを示している。一方、上級生に対す

る不安は、33ポイントも減っており、人間関係づくりが望ましい方向で為されていることがわかる。教員に対する不安感は入学前の35.4%から12.5%と大きく減少しており、教員と生徒の信頼関係が望ましい形で醸成されていることを示している。全体として入学前の不安感を約20%減らしており、生徒が中学校生活に適應できたことがわかる。

不安	項 目	入学前	入学後	期待	入学前	入学後
	学 習 面	48.8	41.4		42.1	24.5
	行 事	27.6	8.3		59.4	53.5
	人 間 関 係	41.0	25.7		47.9	47.9
	部 活 動	21.9	10.5		39.6	37.5
	生徒会活動	35.4	14.6		14.6	6.3
	平 均	39.4	20.1		40.7	33.9

「期待」面では、入学前の期待値を平均約7ポイント減らしているが、全体として充実感を持った中学校生活を過ごしていると思われる。特に、不安感の多かった人間関係が、入学前の期待値が入学後も同じように維持されていることは、稚内中学校の教育活動が安定した人間関係のもとに行われていることを示している。また、学校祭については入学前の期待値を13ポイントも上回っている。合唱コンクールも4ポイント増えている。教員の教え方についてもわずかであるが入学前の期待値を超えているなど、生徒と教員の信頼関係が構築されていることがわかる。こうした成果は、「小学校のときの良さを生かす」ことを基本に学年団としての集団的な学力と生活の向上を目指して指導してきた⁽¹³⁾ 稚内中学校教員の努力によるところが大きい。

Ⅱ. 3. 小中連携・一貫教育の進展と児童の意識の変化

次の表は、稚内中央小学校において小中連携・一貫教育を意図して指導した結果、児童の意識がどのように変化したかを2年間にわたって継続調査したものである⁽¹⁴⁾。(数字は%、資料Ⅲ.3.1及びⅢ.3.2参照)

不安感はすべての項目で低下し、平均値で15ポイントの減少となっている。特に行事や部活動、生徒会活動など、実際に交流体験を積んだ活動に対する不安感が少なくなっている。期待感では、行事や部活動への期待感が高まっているものの平均値では、前年の6年生を下回っており、この点の分析と対応策の検討が課題である。

Ⅱ. 4. 考察

- (1) この調査結果は、児童生徒の意識とその変容が、それぞれの学校における指導や体験を反映したものであることを表しており、小中学校が連携して児童生徒の不安感や期待感に具体的に対応すれば、「中1ギャップ」を克服することができることを示している。

新入生を受け入れた稚内中学校では、学年班長会を中心に家庭学習の習慣化に取り組み、基礎基本の定着を図り学習面での不安解消に努めたという。また、3学期にはオリジナルの寸劇を考案し、稚内中央小学校の6年生に対して中学校の学習や生

不安	項 目	2008.3	2009.3	期待	2008.3	2009.3
	学 習 面	48.8	37.1		42.1	24.5
	行 事	27.6	9.7		59.4	67.6
	人 間 関 係	41.0	35.6		47.9	38.6
	部 活 動	21.9	5.7		39.6	42.1
	生徒会活動	35.4	11.4		14.6	0
	平 均	34.9	19.9		40.7	34.7

活、行事、部活などの紹介を行ってきた⁽¹³⁾。こうした指導と生徒自身の取り組みが、小学6年生の中学校生活に対する期待の高まりと不安感の減少に結びついたものと思われる。

- (2) 一方、中学校に送り出す稚内中央小学校では、保護者、地域、教育委員会も参加した稚内中学校との学校間交流会において、「中1ギャップ」問題を取り上げ、その現状認識を共通にしながら解決の方策を協議している。また、両校の校長・教頭による毎月の懇談会開催や分掌部長同士の打ち合わせなど教員同士の交流を深めてきた。児童生徒の交流では、一日入学や合唱交流、特別支援学級に在籍する児童生徒の合同活動などを行ってきた。保護者や地域に対しては、PTA同士の交流・連携をはじめ各種説明会や懇談会、学校評議員会の合同開催などを実施してきた。さらに、北地区子どもフェスティバルやスクールガードの活動、子育てふれあいカレンダーや子育て新聞の発行と配布を行っている⁽¹⁵⁾。こうした取り組みが、保護者や地域の人々の間に小中の一体感や連携の必要性などを実感させ、それらが児童生徒の不安感を大きく減少させた要因のひとつとなっている。

Ⅲ. 稚内市における小・中連携・一貫教育の現状

Ⅲ. 1. 稚内市における小中連携・一貫教育の歩み

稚内市においては、従来から「子育て運動」⁽¹⁶⁾に見られるような地域ぐるみの教育を土台とした中学校区単位の学校間交流が活発に行われて来た。こうした歴史や伝統、教育風土を踏まえ、2003年度から2ヵ年にわたって取り組まれてきた文部科学省の「学力向上フロンティア事業」の研究（潮見が丘小学校と潮見が丘中学校が研究指定校）をきっかけに、小中一貫教育を展望した小中連携教育がスタートした。稚内市教育委員会は、2004年度の教育執行方針において、「『学力向上フロンティア事業』の結果の分析を行いながら『小中連携』『小中一貫』への足がかりにしたい」と小中一貫教育推進の方針を明確にした。さらに、2004年度から2005年度にかけて実施された天北小中学校の「小中一貫教育実践研究事業」（北海道教育委員会指定研究）2005年度から2006年度にわたり取り組まれた「学力向上拠点形成事業」（文科省指定研究）など、小中一貫教育実現に向けた研究実践が連続的に行われてきた。

こうした実践研究の積み上げを踏まえ、稚内市教育委員会は、2008年度から「小中一貫教育実践研究事業」をスタートさせ「稚内市小中一貫教育推進協議会」を設置した。その目的は、「義務教育9年間を見通した学習指導や生徒指導を展開するための教育課程の一貫性、系統性、継続性等を図った実践研究を行うとともに、研究成果を市内各学校へ普及することにより、児童生徒の豊かな人間性と社会性の育成を図る」ことである。そして、調査研究の内容として、①小中一貫教育カリキュラムによる学習指導の工夫改善、②義務教育9年間を通した生徒指導、③小・中学校の連携を推進する学校運営、④中学校区を基本とした家庭及び地域との連携、⑤その他小中連携・一貫教育の推進に関することをあげ、具体的活動として学校間交流会及び講演会の開催、先進地視察、研究紀要の発刊などに積極的に取り組んでいる⁽¹⁷⁾。

Ⅲ. 2. 稚内市における小中連携・一貫教育の現状

中学校区毎に取り組まれている小中連携・一貫教育と「小中一貫教育推進協議会」が行う指定校（稚

内東小学校、声問小学校、稚内東中学校）による実践研究が統一的に取り組まれ相乗効果を挙げている。今後は、2008年度に改訂された「稚内市学校教育推進計画」に基づく実践が展開されることになる。計画では、「小中連携による一貫性のある指導」の内容として、学習状況の実態に合った教育活動の連続性を図るための教育課程の編成・実施や指導方法の工夫・改善と児童生徒の発達段階に対応する教育を進めるための小中一貫教育に対する支援や教育内容の研究を2本柱に、①教員間の交流（TT指導、授業交流）、②学習活動の接続や重複の改善、③中学校への円滑な移行、④学校間の研究連携、⑤教科連携、⑥9年間を見通した教育活動の創造、⑦児童生徒の健全育成、⑧小中一貫教育、⑨実践や研究の積極的公開、⑩保護者・地域・関係者による評価の工夫などの具体的方策が示されている。

稚内市教育委員会は、「小中一貫教育推進協議会」の事務局を担当するとともに、中学校教員が小学校での授業を行うための兼務発令や小中学校共同による「夢広がる学校づくり事業」などの施策を積極的に展開している。さらには、稚内東中学校の校舎改築に際し、稚内東小学校と接続した新校舎を建築することにより、声問小学校を含む東地区三校による「連携型小中一貫教育のモデル校」づくりを目指している⁽¹⁸⁾。

Ⅲ. 3. 稚内市立小中学校における連携・一貫教育の実例⁽¹⁹⁾

稚内市における小中連携・一貫教育の特徴は、「子育て運動」にみられるような地域ぐるみの教育と中学校区単位の交流・連携の教育活動の教訓と成果を土台に、全市的に取り組みがすすめられていることである。具体的には、相互に授業を観察し研究協議し合う学校間交流をはじめ、授業の乗り入れや行事への参加協力、児童生徒間の交流、研究実践体制の整備、保護者や地域・教育委員会との連携活動など多岐にわたっている。

次に、各中学校区の取り組みの特徴と代表的な実践例を示す⁽²⁰⁾。なお、それぞれの地域における「子ども夏祭り」や「スクールガード」など、小中学校が連携して取り組んでいる地域活動については各地区に共通しているので割愛した。

Ⅲ. 3. 1. 東地区（稚内東小学校、声問小学校、稚内東中学校）

「小中一貫教育実践研究指定校」として、「学習状況の実態と児童生徒の発達段階にあった教育活動の連続性を図り、9年間の学びと育ちを保障する」ことを目的として、「東地区小中一貫教育推進計画2009」に基づく実践研究を進めている。その最大の特徴は、「優しさとたくましさを兼ね備えた子ども」という目指す東地区の児童生徒像を共有していることと、CRT検査を活用しながら小中ギャップや小小ギャップが生じる要素の洗い出しを行い、授業づくり・学級づくりに生かそうとしている点である。

声問小学校は、複式の学級編制をしている極小規模の小学校であり、稚内東小学校との小小交流に配慮した実践研究を行っている。小中一貫教育を実践するのにふさわしい校舎改築について、関係者が共同して検討しておりその成果が期待される。

Ⅲ. 3. 2. 北地区（稚内中央小学校、稚内中学校）

児童生徒の実態から出発するということで、児童生徒の意識と生活の実態調査を行い、それに基づく小中連携・一貫教育の実践研究に取り組んでいるのが特徴である。

具体的には、小学校の英語活動を中学校の英語科教員が指導し、中学校の数学補習授業に小学校の教員が参加するなど、教員相互の授業乗り入れが積極的に行われている。また、児童の中学校一日入学と並行して保護者による授業参観や懇談会を実施するなど、より安心して中学校への入学ができるよう取り組んでいる。児童生徒間交流では、合唱活動への相互の参加や特別支援学級の連携などを実施している。小学校では、高学年に一部教科担任制を導入し中学校における教科担任制への滑らかな移行を図っている。地域関係では、とくに、「北地区子育て連絡協議会」が主催する子育て・教育を学び合う「子育て講演・懇談会」の取り組みが特徴的である。

Ⅲ. 3. 3. 南地区（稚内南小学校、稚内港小学校、稚内南中学校）

稚内南中学校の「地区 PTA」活動や「南地区子育て連絡協議会」による地域ぐるみの子育て・教育運動が根付いている地域である。この地区の活動では、とくに、中学校側が「中学校に入学するまでに各教科で最低身につけてほしいこと」を明らかにするなど教科指導に関する小中の教員間交流が特徴的である。英語学習における連携や、小中学生の「生活リズムのめあて」づくりなども検討されている。また、中学校教員が小学校に出向き道德の授業を行ったり、中学校吹奏楽部による小学校でのコンサートの開催や中学生による「南中ソーラン」の指導など、児童生徒間の交流も活発に行われている。学校間交流では5月と2月に中学校の授業公開を行い、主に学習指導上の課題を協議し12月の小学校での授業公開後には主に生徒指導上の課題について交流している。

Ⅲ. 3. 4. 潮見が丘地区（潮見が丘中学校、潮見が丘小学校）

2008年度に「潮見小中連携実践研究会」を立ち上げ、連携学力部会、連携研究部会、連携生徒指導部会、連携特別支援部会、地域・PTA 連携子育て部会を構成し、実践研究4カ年計画を作成して取り組んでいるのが、大きな特徴点である。その目的を、①9カ年の連続する指導を通じ、子ども一人ひとりに学力と生活力を育てる。②各校が独自性と共同性を発揮し学校力と教師力を向上させる。③小中の PTA で、学校支援・教育参加をすすめる、家庭力と地域力の向上を図ることにおいている。

具体的には、小中連携実践研究会の開催、英語活動の連携（小中教員による TT 指導）、小学校高学年での社会科と理科での教科担任制の試行、小中学校での朝読書の実施、特別支援学級の合同学習、基礎学力実態調査の実施と基礎学力問題集の作成、中学校教員による出前講座（合唱や理科実験など）、部活動説明会、児童生徒会役員交流会、小中合同学校評議員会、教育関係者名簿の作成、「『おはよう」とありがとうの街づくり』旗の波」活動などに取り組んでいる。

Ⅲ. 3. 5. 東ブロック（富磯小学校、宗谷小学校、大岬小学校、宗谷中学校、東浦小中学校）

「宗谷地区小中交流会」の組織を中心に取り組みが進められている。東浦小中学校は、2009年度末を持って閉校し、大岬小学校と宗谷中学校に統合となる。この地区の活動の特徴として、中学生の生活リズムの調査と数学の実態調査に基づく児童生徒の学習と生活の課題把握があげられる。また、産

業教育（水産）や性教育の指導内容の一覧表を作成することにより、小中一貫した指導の流れを明らかにしている。中学校を会場に、小中学生がそれぞれの学習成果を地域に発表する「水産タイム」の取り組みは、この地区の特色ある小中連携・一貫教育の代表的な実践である。また、小学校の運動会や学芸会に対する中学生の協力参加もこの地区ならではの伝統的な小中連携の活動である。その他、学校間交流や体験訪問、出前授業、宗谷地区子育て連絡協議会や沿岸 PTA 協議会の活動、子育てカレンダーや子育て新聞の発行と配布、「まちづくりふるさと標語」の募集やカルタ大会の開催、「宗谷長寿会」との交流などにも積極的に取り組んでいる。合同修学旅行や集合学習、沿岸陸上大会など小・小交流も盛んである。

Ⅲ. 3. 6. 西ブロック（稚内西小中学校、増幌小中学校、天北小中学校、下勇知小中学校、上勇知小中学校）

このブロックの学校は、すべて「小中併置校」であり全校児童生徒数が10数名から数10名の小規模学校である。2002年に近隣7校が統合して新たに開校した天北小中学校を除けば、いずれの学校も100年前後の長い歴史を持っている。したがって、「学校の行事に地域が協力し、地域の行事に学校が協力する」のが当たり前⁽²¹⁾になっており、「小中併置校」の利点を生かした「地域ぐるみの小中一体教育」を展開しているのが特徴である。

具体的には、学力と表現力の向上を共通の課題に取り組んでいる。人的交流の面では、中学校教員による小学校高学年の授業担当や中学生による小学生の学習支援や「縦割り」グループでの農園作業などに取り組んでいる。教育課程では、キャリア教育や性教育、道德教育の分野で9カ年を見通した指導計画を作成し、それに基づいた系統的な一貫指導を行っている。また、児童生徒理解では、小学1年生から学習面と生活面を中心とした「指導カルテ」を作成し継続指導を行っている。教員研修では、小中共同のテーマに基づく校内研修の実施や指導案の合同検討、複式授業の公開などを行っている。また、校長・教頭会や運動会など学校行事を「節」とした小中合同反省会が開催され、反省の交流と課題の共通化を図っている。

Ⅲ. 4. 考察

稚内市における小中連携・一貫教育の実践事例から学ぶべきことは、①各学校・地区における実践と文部科学省や北海道教育委員会の指定校研究を有機的に結びつけ、実践と研究を統一させながら進めていること、②約7年間にわたる実践研究の積み上げにより、各学校と教育委員会が小中一貫教育の意義や方向性、方策などを共有し一体となって取り組んでいること、③地域性と児童生徒や教職員の実態を踏まえた個性ある小中連携・一貫教育が展開されていること、④長年にわたって取り組まれてきた地域ぐるみの子育て・教育運動に支えられていること、⑤9カ年を見通した教育課程づくりに取り組み、系統的で一貫性のある学習・生徒指導を目指していること、⑥潮見が地区のように小中一貫教育推進の中核を研究組織に置いていること、⑦小中一貫教育に対する教育委員会の考え方や方針、計画が明確であることなどである。

Ⅳ. 稚内市における小中連携・一貫教育の課題と展望

現在の到達点を確かめ、検証し、更なる改善充実に努めることを前提に、当面、次のような課題について解明に努めることが小中一貫教育への道を拓くことになる。

- (1) 中学校区内の小中学校で、目指す児童生徒像を含む「小中一貫学校園」構想を練り上げる。
- (2) 児童生徒の実態と学校・地域の状況に応じ、「中1ギャップ」のような具体的で現実的な実践課題を切り口に、年次的な実践研究計画を作成し実践する。
- (3) 実践研究の成果を各校の学校経営方針と教育課程に反映させるとともに、作成可能な領域・分野から小中一貫の指導計画づくりを行う。
- (4) 児童生徒に直接的な影響を与える指導方法については、特に重視し、小中学校の特性を生かしつつ共有化して児童生徒の不安や不適応の解消に努める。
- (5) 児童生徒の相互交流や保護者・地域との連携を強め、児童生徒を主体者とした稚内らしい地域ぐるみの小中一貫教育を創る。
- (6) 稚内東中学校の校舎改築を契機に、東地区3校による「稚内東学園」を立ち上げ、連携型の小中一貫教育のモデル校づくりをすすめる。
- (7) 小中一貫教育推進のための教育条件や教育環境の整備に努める。

Ⅴ. まとめ

小中一貫教育推進の現実的課題である「中1ギャップ」の克服にとって重要なことは、入学当初の「第一次適応」とあわせて、6月以降の「第二次適応」の段階における指導である⁽²¹⁾。そのためには、児童生徒の実態から出発し、児童生徒の意識の変容に着目しながら取り組みを進めること、そのねらいを学力向上にのみ特化することなく、生活力や社会性など一人ひとりの児童生徒の全面発達を保障する見地から取り組むこと、学校と地域、教育行政の共同事業として地域性を生かしながら地域ぐるみの実践研究を展開するという視点が重要である。また、幼少連携、中高連携も今後の大きな課題である。

今後、9年間を見通した義務教育の弾力化と多様化が、全国的に急速に進展することが予想される中で、関係者の共同の努力により「稚内型」の小中一貫教育が着実に力強く推進されることを心から期待する。

資料Ⅱ．１．１．【小学６年生が抱いている中学校生活への期待】

	項 目	ア ン ケ ー ト ・ 結 果
学 習 面	教科の勉強	17名(35.4%) 美術・体育
	選択教科	33名(68.8%) 理科・体育
	総合的な学習の時間	16名(33.3%)
	先生の教え方	19名(39.6%) 分からないところを分かりやすく教えてくれそう
	勉強の仕方	19名(39.6%)
	テスト	12名(25.0%)
	成績	15名(31.3%)
	家庭学習の仕方	19名(39.6%)
	高校進学	16名(33.3%)
	その他	4名(8.3%)
行 事	運動会(体育祭)	28名(58.3%)
	学校祭(文化祭)	32名(66.7%)
	合唱コンクール	15名(31.3%)
	修学旅行	39名(81.3%) めちゃくちゃ楽しみデース
	その他	5名(10.4%)
人 間 関 係	友だち	34名(70.8%)
	上級生	17名(35.4%)
	先生	18名(37.5%)
	その他	0
部 活	体育系	29名(60.4%) バレー部入部予定
	文化系	9名(18.8%)
生徒会活動		7名(14.6%)
その他		0

カテゴリー平均：学習面42.1% 行事59.4% 人間関係47.9% 部活39.6% 生徒会活動14.6%

資料Ⅱ． 1． 2． 【小学6年生が感じている中学校生活への不安】

	項 目	ア ン ケ ー ト ・ 結 果
学 習 面	教科の勉強	30名(62.5%) 英語、新しい教科
	選択教科	10名(20.8%)
	総合的な学習の時間	13名(27.1%)
	先生の教え方	14名(29.2%)
	勉強の仕方	20名(41.7%)
	テスト	37名(77.1%) テスト範囲が広い
	成績	35名(72.9%) 悪かったらどうしよう
	家庭学習の仕方	22名(45.8%)
	高校進学	30名(62.5%) 高校入れなかったらどうしよう
	その他	6名(12.5%)
行 事	運動会(体育祭)	11名(22.9%) 足おそいから
	学校祭(文化祭)	16名(33.3%)
	合唱コンクール	19名(39.6%) おんちだし...
	修学旅行	7名(14.6%)
	その他	4名(8.3%)
人 間 関 係	友だち	8名(16.7%)
	上級生	34名(70.8%)
	先生	17名(35.4%)
	その他	5名(10.4%)
部 活	体育系	10名(20.8%)
	文化系	11名(22.9%)
生徒会活動		17名(35.4%)
その他		0

カテゴリー平均：学習面48.8% 行事27.6% 人間関係41.0% 部活21.9%

生徒会活動：35.4%

資料Ⅱ. 3. 1. 【中学校生活への期待に関する小学6年生の意識の変化】

	項 目	アンケート結果(%) ()内は2008.3調査結果
学 習 面	教科の勉強	36.4(35.4) 数・英・理・社・国
	選択教科	38.6(68.8) 選べるから
	総合的な学習の時間	15.9(33.3)
	先生の教え方	45.5(39.6) やさしく、楽しく、わかりやすく。一日入学が楽しかった
	勉強の仕方	22.7(39.6) みんなで楽しく勉強したい
	テスト	18.2(25.0) 高得点を取りたい
	成績	20.5(31.3)
	家庭学習の仕方	18.2(39.6) 自分たちで取り組みたい
	高校進学	13.6(33.3) 高校へ行きたい。稚高に入りたい
	その他	6.8(8.3)
行 事	運動会(体育祭)	61.4(58.3) なわとび、協力、小学校と違う種目、団結
	学校祭(文化祭)	75.0(66.7) 劇がはじめて、初めてだから、もりあげたい
	合唱コンクール	38.6(31.3) 仲間と一緒に頑張る、練習、真剣にやる、面白そう、歌が好き
	修学旅行	95.5(81.3) どこに行くのか、買い物、札幌より遠いところへ、小と違う
	その他	6.8(10.4)
人 間 関 係	友だち	54.5(70.8) 新しい友だち、いっぱい作りたい、絆を深めたい
	上級生	25.0(35.4) いろいろ関われる、仲良くしたい、優しいといいな
	先生	36.4(37.5) 新しい先生・どんな人?
	その他	4.5(0)
部 活	体育系	65.9(60.4) バスケット部、野球部、サッカー部、厳しく楽しくやりたい、真剣に、スポーツが好き
	文化系	18.2(18.8) 軽音楽部、吹奏楽部
生徒会活動		0 (14.6)
その他		0 (0)

カテゴリー平均(その他を除く、()内は昨年度調査結果)

学習面25.4%(42.1) 行事67.6%(59.4) 人間関係38.6%(47.9) 部活42.1%(39.6)

生徒会活動0%(14.6)

期待値全体の平均 34.7%(40.7)

資料Ⅱ. 3. 2. 【中学校生活への不安に対する小学6年生の意識の変化】

	項 目	アンケート結果(%) ()内は2008.3調査結果
学 習 面	教科の勉強	56.8(62.5) 社会、進み方、教科が多く難しそう、数学、英語、技術、美術スピード、みんなについていけるかな、勉強ができない
	選択教科	13.6(20.8)
	総合的な学習の時間	11.4(27.1)
	先生の教え方	18.2(29.2) スピードが速そう、質問ができなさそう、小学校と教え方が違う、ついていけるかな、わからないことをきちんと教えてほしい
	勉強の仕方	34.1(41.7) やる量・時間が増える、こまかく教えてほしい
	テスト	59.1(77.1) 範囲が広そう、テストが多い
	成績	61.4(72.9) 悪くなるのがこわい、勉強が苦手だから、評価が厳しい、順位がつくのがいやだ、成績と内申・進学とのつながり
	家庭学習の仕方	34.1(45.8) どうやればいいかわからない、家庭学習をあまりやっていない、どのくらいやればいいのか、何をやったらいいのか
	高校進学	45.5(62.5) ちゃんといけるか、どうしたらいいの、
	その他	2.3(12.5)
行 事	運動会(体育祭)	13.6(22.9) なわとびがとべない、みんなについていけるか
	学校祭(文化祭)	9.1(33.3)
	合唱コンクール	13.6(39.6) 声を出すのが苦手
	修学旅行	2.3(14.6)
	その他	2.3(8.3)
人 間 関 係	友だち	22.7(16.7) クラス替えが不安、どうつきあえばいいか、人間関係
	上級生	63.6(70.8) どう接したらいいか、わからないところを教えてくれるか、こわい、なかよくできるか、いじめ、うまく話せないかも
	先生	20.5(35.4) かかわり方、名前を覚えられるか、こわい、一人ひとり見てほしい、冷たそう
	その他	0 (10.4)
部 活	体育系	4.5(20.8) バスケット部
	文化系	6.8(22.9)
生徒会活動		11.4(35.4)
その他		小便器が低くて隣に見られる、裏サイトなどがあるからこわい

カテゴリー平均(その他を除く、()内は昨年度調査結果)

学習面37.1%(48.8) 行事9.7%(27.6) 人間関係35.6%(41.0) 部活5.7%(21.9)

生徒会活動11.4%(35.4)

不安値全体の平均 19.9%(34.9)

●注・引用文献

- (1) 文部科学省『中央教育審議会答申』「義務教育を中心とする学校種間の連携・接続の在り方に大きな課題がある。
(中略)学校種間の連携・接続を改善するための仕組みについて種々の観点に配慮しつつ十分に検討する必要がある。」(第2部第1章(3)義務教育に関する制度の見直し)2005.10
文部科学省『中学校学習指導要領』「中学校入学当初においては、個々の生徒が学校生活に適応するとともに、希望と目標を持って生活できるよう工夫すること。」(特別活動、第3指導計画の作成と内容の取り扱い(3))2008.3
- (2) 「精神的に幼いために学級という集団活動になじめなかったり、学校生活のルールが理解できなかったりすることから、授業中に席を立てて歩き回ったり、騒いだりする現象」『読売新聞』2004.4.28夕刊
- (3) 新潟県教育委員会『中1ギャップ解消に向けて』「中学1年生で、いじめや不登校が急増する現象」2006.3
- (4) 文部科学省『平成19年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』2008.11
- (5) 文部科学省『平成20年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』(速報値)2009.8
- (6) 稚内市教育委員会適応教室「つばさ学級」調べ(毎年度5月1日現在)2009.11
- (7) 稚内市教育委員会適応教室「つばさ学級」室長中村裕美子氏インタビュー2009.11.24
- (8) 稚内市教育委員会教育相談所長平間信雄氏インタビュー2009.11.24
- (9) 稚内南中学校教諭和田浩氏『中学1年生から小学6年生へのアドバイスに関する調査』稚内南中学校1年生72名対象(回収率93.8%)2008.5
- (10) 古川碧『「中1ギャップ」克服に関する調査』稚内市公立小中20校対象(回収率80%)2009.2
- (11) 古川碧『中学校生活への期待と不安に関する調査』稚内中央小学校6年生48名対象(回収率100%)2008.3
- (12) 古川碧『「中1ギャップ」に関わる児童生徒の意識の変化に関する調査』稚内中学校1年生48名対象(回収率100%)2009.3
- (13) 稚内中学校宮崎秀紀、工藤広美教諭インタビュー2009.3.5
- (14) 稚内中央小学校教頭大島朗氏『中学校生活への期待と不安に関する調査』稚内中央小学校6年生44名対象(回収率100%)2009.3
- (15) 稚内中央小学校教頭大島朗氏インタビュー2009.10.29
- (16) 1978年1月に結成された「非行問題懇談会」による活動とそれらを発展させ、1984年7月に立ち上げた「稚内市子育て推進協議会」を中心に組み込まれてきた市民ぐるみの子育て・教育運動の総称。会長は歴代の稚内市長が務めている。稚内市教育委員会発行、稚内市子育て推進協議会編集『平和学習資料：子育て平和都市宣言』2008 22P
- (17) 稚内市教育委員会『稚内市小中一貫教育推進協議会設置要綱』2008.5
- (18) 稚内市教育委員会『教育執行方針』2009.3
- (19) 稚内市小中一貫教育推進協議会『稚内市小中一貫教育研究実践事業中間報告書』2009.3
- (20) 宗谷公立学校教頭会稚内市西ブロック教頭会『稚内市における小中一貫教育の推進と教頭の関わり』第43回北海道公立学校教頭会研究大会札幌大会提言資料2009.9
- (21) 同上
- (22) 「小中の連携を重視した教育へ」田中統治『教育展望』20P 下段9行～11行教育調査研究所2005.3

●参考文献

教育調査研究所 2005 『教育展望』.
児島邦宏・佐野金吾編
2006 『中1ギャップの克服プログラム』 明治図書.
上川町中高一貫教育推進委員会・北海道高等学校教育経営研究会編著
2004 『豊かな中高一貫教育を創る』 学事出版.

- 稚内市校長会編 2007 『広報誌』第102号 .
 稚内市教育研究所発行
 2005 『稚内の教育』第159号 .
 西川信廣著 2006 『習熟度別指導・小中一貫教育の理念と現実』ナカニシヤ出版
 時事通信社 2006 『内外教育』8.29号 .
 学校運営研究会 2006 『学校運営研究』明治図書 1月号 .
 教育開発研究所 2005 『教職研修』1月号 .
 石川晋・石川拓・高橋正一
 2009 『中1ギャップ』 学事出版 .
 品川区教育委員会編著
 2005 『品川区小中一貫教育要領』 講談社 .
 広島県五番町小学校・二河小学校・二河中学校編著
 2008 『公立小中で創る一貫教育』ぎょうせい .
 品川区立小中一貫校日野学園著
 2009 『小中一貫の学校づくり』教育出版 .

●英文タイトル

The present state and prospects of 9-year education at cooperative or combined elementary and junior high schools that makes the most of children's voices and regional features

--- On the basis of what Wakkanai City, Hokkaido, has done to face this challenge ---

●英文要約

The purpose of this paper is to consider what is the most desirable way to conduct 9-year education at cooperative or combined elementary and junior high schools, based on practical studies made at public elementary and junior high schools in the city of Wakkanai, Hokkaido.

These studies have three features. Firstly, they pay constant attention to the actual conditions of schoolchildren and changes, if any, in their consciousness. Secondly, they do not only aim at improving children's academic abilities; they aim at promoting their overall development, including their social nature or their abilities to live as self-reliant members of society. Thirdly, being a joint project of schools and educational administration, these studies are given support by the whole community, because they try to make the most of the regional features.

I am confident that this kind of cooperation will help bridge the gap between elementary and junior high schools, thereby providing a solid foundation of 9-year education that guarantees the steady and favorable growth of schoolchildren.